

生命込められた一期一会の感動

矢代 若葉

秋たけなわの10月21日、東京文化会館小ホールで行われた岡田博美さんのピアノリサイタルー矢代秋雄へのオマージュの満を持しての見事な演奏は、私のみならず、あの世の多くの聴衆の耳と心に、今なお鮮やかな感動を残しています。遺族である私自身はいささか客観性を欠くかもしれませんが、この度寄せられた多くのコメントの中のいくつかを、各々の方のご了承の下に記させていただきたいと思います。

「羨ましい程の美意識の持主、それでいてその面だけに走って了わず、音楽の中の知的な要素とご自分を最高に弾かせる冷静さを見事に保って弾かれたと思います。技術の凄さが最も云々されるかもしれませんが、それを司る内側の集中力に心から感服いたしましたー」(ピアニスト・井上二葉さん)

「岡田さんの演奏を聴くことができ本当によかった。近年聴いた中で屈指のコンサートだったと思っています。(音楽之友社社長・堀内久美雄氏)

「あのような演奏は、岡田博美にしかできない！」(カメラータ・トウキョウ会長・井阪紘氏)

「矢代秋雄はあのピアノソナタを岡田博美の今日のために書いておいたのではないかと
思うほど、作品と演奏者が一体化していた」(岡山市立オリエント美術館館長・谷一尚氏)

「矢代作品を弾くようになったきっかけは？」との質問を受けた岡田さんは「学生時代、楽譜を買って『いいな』と思ったので」と淡々と答えられました。お若い岡田さんは生前の主人と会っていただく機会はなかったのですが、常々主人が望んでいた「優れた音楽家資質と、卓越したテクニックと鋭い感覚を兼ねそなえた音楽家」であり、「私が楽譜に書ききれなかったことを推測し、見出し、解釈し、具体的に示してくれる」理想のピアニストに、あの夜主人は出会うことができたのです。加えて、終生の口癖であった「一音一音を大切に」選んだ演奏に、主人は作曲家冥利とうなったことでしょう。岡田さんと主人の作品との間には立ち入ることのできない緊密な領域ができあがったようで、ちょっと羨ましい気持ちさえいたしました。もし、存命であったなら、お酒好きのこの兩人、共に飲んで語って尽きることなくピアノを弾いて、秋の夜長も更けわたったことであらうと、切なく思い巡らしました。

「ソナティネ」と「ノクチュルヌ」、若書きの二曲も、この上なく魅力的な調味料で格調高く仕上げてくださいました。十五歳の頃の主人が「ノクチュルヌ」を献呈した当の井

上二葉さんが「和音の多彩さがある、弾かなければサマにならないと思いました。素晴らしいピアニストが現れたものです」と感想を伝えてくださいました。

連弾曲である「夢の舟」を、岡田さん御自身で二手用に美しい編曲をして弾いてくださったアンコールは、思いもかけない不意打ちでした。とめどなく涙が流れて止まりませんでした。

あの晩のコンサートの中で私は久々に「ぼくはここにいる」という主人のメッセージをききました。そして思い起こしたのは故ピュイグ・ロジェ先生の言葉でした。「演奏とは演奏者の生命を作品に吹き込むこと。だから作曲者がよみがえるのです。」まさに、生命込められた一期一会の感動を与えられた演奏会でした。

私たちは一年後の岡田さんの次のコンサートをただ待つてさえいればいいのです。そうすれば、まちがいなく、また魂にゆさぶりをかけられるような至福の演奏を聴くことができるのです。

岡田博美さん御夫妻の御活躍と御健康を心から願っています。

2006 年師走